

6) 心室中隔欠損症術後感染性心内膜炎を発生した1例

工藤 路子・鈴木 正孝 (新潟県立中央病院) 循環器科
高野 諭 (同 胸部外科)
羽賀 学・矢沢 正知 (同 胸部外科)

心室中隔欠損症術後15年目に感染性心内膜炎を発生した1例を経験した。

症例は18歳女性である。生下時より心雑音から心室中隔欠損症と診断され、3歳にて心室中隔欠損症閉鎖術が施行された。術後、大動脈弁閉鎖不全症、僧帽弁閉鎖不全症が出現していた。

97年6月、高熱を主訴として当科を受診した。心エコー図上、心室内のパッチ上に疣贅をみとめ、感染性心内膜炎と診断した。抗生剤治療にていったん改善をみたが、炎症が再燃し、脾梗塞も合併した。抗生剤投与を行い、症状、炎症反応とも改善したが、感染性心内膜炎の再発予防のためには、外科的治療が必要と考えられた。

文献検索上、このような例はまれであるが、心室中隔欠損症術後遠隔期においても感染性心内膜炎の危険性を念頭においた管理が必要である。

7) ヘリカル CT が肺塞栓症の診断・治療効果判定に有用だった3例

笠井 英裕・五十嵐 裕
林 学・犬塚 博
小島 研司 (荘内病院内科)

肺塞栓症、及びその原因となる深部静脈血栓症の診断と治療効果判定にヘリカル CT が有用だった3例について報告する。

症例1：65歳男性、冠動脈造影施行翌日の安静解除直後に胸痛、呼吸困難が出現した。血液ガス分析では低酸素血症、低炭酸ガス血症が認められた。肺血流シンチグラフィでは右肺の広範な血流低下を認め、ヘリカル CT では右肺動脈に血栓と思われる陰影欠損を認めた。抗凝固療法後、胸部ヘリカル CT で発症当日認められた血栓と思われる陰影欠損像は消失した。

症例2：68歳女性、呼吸困難、胸痛にて来院。血液ガス分析で低酸素血症、低炭酸ガス血症が認められた。

肺血流シンチグラフィ、ヘリカル CT にて肺塞栓症と診断し抗凝固療法を開始した。ヘリカル CT では発症直後両側肺動脈近位部に血栓と思われる欠損像が認められたが、抗凝固療法後に消失した。また発症直後右大腿中部レベルより遠位の大腿静脈から膝窩静脈にかけ

て血栓と思われる欠損像が認められたが、抗凝固療法後右大腿静脈内の血栓は消失した。

症例3：41歳男性、5か月前右踵骨を骨折し、右足首の固定を行った。3か月前より右大腿部腫脹、表在静脈怒張、胸痛を認めた。労作時の息切れ強く入院した。

肺血流シンチグラフィにて肺塞栓症と診断し抗凝固療法を開始した。下大静脈腎静脈分岐部より右外腸骨静脈にかけて血栓と思われる欠損像が認められた。深部静脈血栓症と診断し、現在ヘリカル CT で欠損像の縮小傾向を認め経過観察中である。

肺塞栓症3例を経験した。肺塞栓症の診断には肺血流シンチグラフィが有用であるが、高速ヘリカル CT は肺動脈より下肢まで短時間で撮像可能で、肺動脈内の血栓及び深部静脈血栓の描出が直接可能であった。肺塞栓症の直接診断、深部静脈血栓症の診断及び治療効果判定に有用であった。

II. テーマ演題「血液浄化療法と心血管疾患」

1) 15年間血液浄化療法を施行し全経過24年だった家族性高コレステロール血症ホモ接合体の1例

高野 諭・工藤 路子 (新潟県立中央病院) 循環器科
鈴木 正孝 (同 内科)
丸山雄一郎 (同 内科)

症例は24歳男性で、24年間新大小児科を初め多くの医師の手で治療されていた方である。

生下時より黄色種を認め、5歳時に新大小児科で家族性高コレステロール血症 IIa ホモ型と診断された。

9歳より血漿交換療法が新大小児科で開始され、13歳には LDL apheresis 療法に変更されている。しかし、14歳7ヶ月で狭心症発作を起こし、16歳で不安定狭心症へと増悪した。

立川病院にて施行した冠動脈造影では左主幹部病変を含む2枝の高度狭窄病変だった。

同院胸部外科で LAD への SVG を用いた CABG 手術が'88年9月に施行された。

以後経過は順調だったが、'97年2月熱発と呼吸困難を訴えて当科へ緊急入院した。肺炎と心不全であり、バイパスグラフトは良好な血流を保っていた。肺炎は治癒するも、心不全は継続し、このため第19病日に死亡された。血液浄化療法は15年間継続して施行されたことになる。

この疾患の血液浄化療法の効果と限界を知る意味で興